日本語行為文の理解における視点取得

○池田裕哉¹・紀ノ定保礼²・篠原一光¹

(¹大阪大学大学院人間科学研究科・²静岡理工科大学)

キーワード: 心的シミュレーション、行為文、再認記憶

Perspective taking in comprehension of Japanese action sentence.

Yuya IKEDA¹, Yasunori KINOSADA² and Kazumitsu SHINOHARA¹

(¹Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ, ²Shizuoka Institute of Science and Technology)

Key Words: mental simulation, action sentence, recognition memory

目 的

行為を表す文章を読むとき、自動的に行為内容の心的シミュレーション(mental simulation)が行われるが、観察者ではなく行為者の立場で行われる場合に文章自体の記憶成績が高くなる。視点は言語材料によって左右され、主語が一人称や三人称の場合ではなく二人称の場合に行為者としてシミュレーションされ、記憶成績が向上する(Ditman et al., 2010)。しかし、日本語材料で行われた追試では人称代名詞の効果は見られなかった(望月・相澤, 2016)。これは日本語での人称代名詞の役割が他言語とは異なっているためである可能性があり、文章の一部を操作することでより強く視点取得を促した場合にDitman et al. (2010)と同様の結果が得られるかどうかについて検討した。

方 法

【実験参加者】

日本語を母語とする大学生・大学院生 30 名(男性 17 名、女性 13 名、平均年齢 20.8 歳 SD = 1.01)を対象に実験を行った。

【刺激と手続き】

SuperLab 4.5 を使用して刺激を呈示した。学習課題、遅延課題、再認課題のフェーズに分けた。学習課題の刺激材料は望月ら(2016)を元に、三つの文を 1 セットとして合計 36 セット作成した。第 1 文が登場人物の情報、第 2 文が人物の職業に応じた状況、第 3 文が人物の状況に合った行為の遂行を表しており、視点条件(行為者視点(例: あなたは 54 歳の看護師です/あなたは今、入院患者の診察をしています/あなたはちょうど患者の腕に血圧計を巻いているところです)、傍観者視点(例: 彼女は 54 歳の看護師です/彼女は今、入院患者の診察をしています/彼女はちょうど患者の腕に血圧計を巻いているところです)、観察者視点(例: 彼女は 54 歳の看護師です/彼女は今、入院患者の診察をしているそうです/彼女はちょうど患者の腕に血圧計を巻いているところです)、受け手視点(例: 彼女は 54 歳の看護師です/あなたは今、彼女の診察を受けています/あなたはちょうど彼女に腕に血圧計を巻かれているところです))と行為の具象性(高(例: 乗せている)、低(例: 相談している))を操作した。

実験の始めに全体の流れと記憶に関する研究であることを説明した。学習課題では第 1 文から第 3 文まで、500 字/分の早さで自動的に切り替えて呈示した。36 セット全て呈示した後、遅延課題としてアルファベットの照合課題を約 10 分間行った。再認課題では、刺激が学習課題に存在したか否かをできるだけ早く正確に判断してキー押しをするように教示した。学習課題における第 1 文と第 3 文を再認項目とした。それぞれの主語を省き、新文と旧文が半々となるように呈示して反応の正誤と反応時間を記録した。

結果と考察

再認成績について d' を算出し、実験参加者内 3 要因分散分析を行ったところ視点条件の主効果($F(3, 87) = 0.392, n.s.$)と視点条件を含む交互作用($F_s(3, 87) < 0.476, n.s.$)

は見られなかった(図 1)。再認時間については正答の少なかった 2 名を除外し、刺激の文字数が異なる人物情報文と行為文それぞれで 2 要因分散分析を行った。行為文の場合に行為の具象性の主効果が有意であり、具象性高条件で速くなった($F(1, 27) = 26.144, p < .001$)。その他の主効果・交互作用は見られなかった($n.s.$)。

視点情報が想起されたならば、視点条件によって再認成績が変化し、行為者視点の際に再認成績が高くなると考えられる。しかし、どの指標においても視点条件の効果が見られず、心的シミュレーション時に視点情報は想起されていなかった。再認時間について行為文再認のみ具象性の効果が見られたのは、行為のシミュレーションが行われ、身体動作を伴う行為の方がアクセスしやすい形で保存されていたためであると考えられる。以上より心的シミュレーションは行われているが特定の視点は想起されていないことが示唆された。Ishii et al. (2003)によると、アジア人は言語材料の文脈を、西洋人は内容を重視する傾向がある。そのため文章材料には影響を受けにくく、加えて 3 文という限定的な文脈であることも視点取得を妨げたと考えられる。また日本語は人称代名詞の使用頻度が低く、主語を省略することも多い言語である。日本語理解の際には心的シミュレーション時に行為主の立場が省略され、視点情報が明確にされない傾向があると考えられる。

図 1 行為文再認における d' の平均値

引用文献

- 望月正哉・相澤裕紀 (2016). 人称代名詞は日本語行為文の再認記憶に影響しない. 日本認知心理学会第 14 回大会発表論文集, pp. 88.
- Ditman, T., Brunye, T. T., Mahoney, C. R., & Holly A. Taylor. (2010). Simulating an enactment effect: Pronouns guide action simulation during narrative comprehension. *Cognition*, **115**, 172-178.
- Ishii, K., Reyers, J. A., & Kitayama, S. (2003). Spontaneous attention to word content versus emotional tone: Differences among three cultures. *Psychological Science*, **14**, 39-46.